

令和3年度第1回射水市ひきこもり支援推進協議会議事録

日 時 令和4年3月24日（水）
午後1時30分～午後3時
場 所 救急薬品市民交流プラザ

1 開会

2 あいさつ 小林会長

3 議題

(1) 令和3年度事業報告 資料1、資料1-2

【質疑応答】

会長： 今年度は、全体的に昨年よりも相談件数は増えた。アウトリーチ支援員を配置し、訪問できるようになったことで、本人と繋がれるケースが増えた。

また、ひきこもりサポーターの数は増えたが、積極的な活動までは至らず、すてっぷカフェに少しずつ参加するにとどまっている、

さらに、Web上でひきこもりに関するアンケートを実施した。アンケート結果から当事者のニーズやどこで困っているのか見えてきたので、今後の課題となる。

委員： すてっぷの活動は、少し前に進んだと思う。このアンケートは、気付いた人達だけが回答したということか。例えば、施設で働く人にもひきこもり者で社会参加できるようになってきた人がいるが、そのような人達へのアンケートなど、引き合いに出していくことによって、当事者への励ましや見える化ができると思う。

委員： アンケートの中で、「当事者の声を活かしてほしい」という意見がある。数だけを見てそのままにするのではなく、実際に動くということをするればいいと思う。それによって、当事者が何に困っているのか、人それぞれに見えてくる。受け身ではなく積極的にかかわっていくことが射水市の特徴であってほしい。相談したいと思っていない人が何を求めているのかを考えてほしい。

委員代理： アンケートの中で、「ひきこもり状態であっても、あまり深刻すぎずにとらえないでほしい」という意見があった。深刻な人もいるし、そうでない人もいることを認識する必要がある。

他市の方から「射水市のアンケートは、ひきこもりという言葉を多用し

ているね。」と言われた。表現が直接的すぎるので、そうではない表現が必要。「ひきこもり」という言葉が独り歩きして、偏見や差別を助長しないか心配している。次回のアンケートでは、この点を改善されることを期待する。

また、アンケートの中で「相談したい人」という項目があったが、「同じ悩みを抱える人」ではなく、「同じ経験をしてきた人」という表現がいいのではないか。実際に、「同じ経験をしてきた人に会いたい、相談したい」という人はとても多い。ピア・カウンセラーという存在を知ってほしい。

会長： 表現ひとつで回答してもらえらるかどうかが変わる。行政が作ると直接的な表現になりがち。項目が同じほうが前回と比較できるが表現を考えていくことは非常に重要。

(2) 令和4年度事業計画（案） 資料2

【質疑応答】

委員： ひきこもり当事者同士が手紙を出すなど、交流をすることは有効だと思う。ひきこもりサポーターは、ひきこもりを理解することはできるが、同行は厳しいと思う。ただ、継続していくことは大事。一番は専門職がフォローすることだが、それもひとりでは無理。窓口でひきこもり相談を受けたら、会えなくてもいいからまず訪問していくことも大事だ。

委員： 最近では、若者生きづらさ寄りそいネットワーク協議会というところが、「ブレイクタイムとやま」という居場所紹介動画をYouTubeで配信している。ネットを見ている当事者の方もいると思うので、様々な媒体で情報を発信していくことが重要。

委員： 家族ではなく、直接当事者へつながっていくような仕組みを構築してほしい。

委員： 社会参加を支援している人の連絡協議会があってもいい。国や県の制度を上手に活用することによって、社会参加の糸口を見つけることもできる。そのような制度の勉強会や意見交換会があってもいいと思う。

委員： 来年度から、当事者向けの居場所の提供と家族会の開催を分けて行うことになる。別々に相談を受けても状況がよくわからない場合もある。どのように対応をしていくのか。

事務局： 個別に対応していくことになる。来年度当事者向けと家族向けで分けた理由は、家族に向けた支援を強化したかったから。交流や勉強会を通して、家族の当事者に対する理解を促進したい。

委員： 家族といっても全て内容が違う。個別支援のほうが良いと思う。ひきこもりは、家族に問題があることが多い。

委員： 国の予算編成を見ると、孤独・孤立対策に関する予算が強化され担当大臣を設けるという話もあった。来年度に増額補正があるのかどうか、そのあたりの情報を教えてほしい。

福祉保健部長： 市としては、国の動向を見ながら可能であれば補正予算も検討したい。家族への支援に関しては、これだけが適切な方法とは思っていない。多様なあり方の中から多様な気づきを得ること、家族が地域から孤立することを防ぐという意味で、来年度は、当事者と家族と分けた支援を行いたい。動きの中で、都度修正すべきところがあれば修正をしていきたい。

委員： ひきこもり当事者と家族が同居している以上、家族を含めて支援することが重要だと思う。アウトリーチは人の人生を背負うことになるので、それなりに覚悟が必要だ。

委員： 射水市のひきこもりの支援体制は、「すてっぷ」を中心に支援することになっているが、支援者同士の横のつながりを強くすることで、さらに良くなっていくと思う。

副会長： ひきこもりという現象を多くの人に知ってもらうことが大事。個別支援については、横のつながりを構築し、持ち味を発揮することが重要だと思う。介護の方では、ケアマネジャーが情報をネットで連絡し、情報共有するというシステムがあるが、この協議会でもそのようなシステムを導入できればいいのかなと思う。サポーターの養成については、座学ではないシミュレーションが必要。現場を見ることがベストだが、それだとお互いにきついで、例えば他の地域での成功例や記録の動画を繰り返し見ることで、支援のイメージがしやすいと思う。専門家につながぐために皆さんに知識を持ってもらうことと支援者が専門家につながぐという意志が必要だ。

会長： ひきこもり支援は息の長いものになる。地域の人材を時間かけて育てていくことになる。

委員： 市ではDXの活用を提案しており、社協でも挑戦しようとしている。若い世代ほどネットでの情報収集をしているが、意図的に情報が見えるように注力してほしい。

委員： 専門家の熱意が住民を動かしていくと思うので、引き続き事業の推進、強化をお願いしたい。